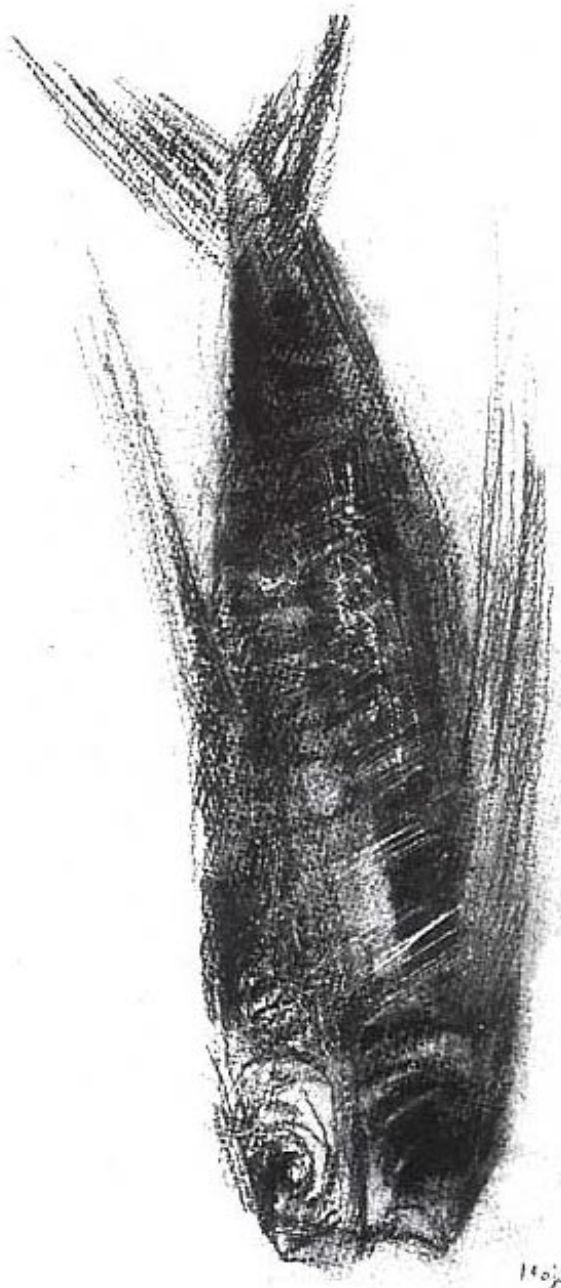


昭和43年7月1日第3種郵便物認可  
平成17年6月5日発行(毎月5日1回発行)  
第45巻6月号(通巻551号)

# 風土



6

1907

葱坊主 神蔵器

牡丹咲く日本武尊かな

菖蒲葺く神奈川宿に第一歩

昔アメリカ領事館鯉のぼり

膝つけば祈りのさまにつくしんぼ

灯台のうつらうつらと風光る

釈迦の掌をはみ出してをり葱坊主  
音離れ板木ののこる春の暮  
能ヶ谷に叱られに行く目借時  
わが死後の眺めに散りぬ八重桜  
寂光院前の茶店の花菜漬  
うすうすと昼月育つ牡丹かな  
牡丹咲く十日のほどの太郎冠者



# 竹間集

同人作品



野火走る

関根 洋子

花芽葉芽秘めぬて西行桜かな  
ポケットに過去しのばせて青き踏む  
ふらここを漕ぎて過去とも未来とも  
花辛夷息ととのへてゐるやうな  
分霊の神々の座に春の雪  
神主が申して柳葉椿かな  
野火走る将門拓きたる大地

花 筏

田中佐知子

露の臺漉屋より水流れ出づ  
雪解水汲み闕伽桶に光満つ  
雁供養遠き嶺々雪残り  
涅槃雪浜に流木焚かれをり  
鴨引きしあとの入江の波立てり  
目借時鉛筆の芯よく折れて  
吉野より流れて来たる花筏

さくら

南うみを

でで虫の殻吹かれくる涅槃かな  
植木市果てし轍に雨の粒  
みづうみの鳥居くぐりぬ初つばめ  
翔けば珠とひかるや春の水  
つばめ来と洗濯物のひるがへり  
田の面のひかりだしたる桜かな  
泥深くひづめの跡や花かがり

春いろいろ

— 中谷 葉留 —

楸の芽のいま摘まれしと思ひけり  
やはらかき会話のはづむ雛の日  
山椿笑ひころげて落ちにけり  
啓蟄やバス停に椅子一つ増え  
メタセコイヤの裾の水音寒もどり  
鶯や双手を上ぐる母子像  
通ひ合ふ体温のごと蝌蚪の紐  
目借時ほとけどぢやうの池巡る  
春の蝶 D 5 1 に息重ねをり  
坐るにも起つにも遍路笠を持ち

逃水の先に見え来し亡夫の村  
送電線弛みたるみて山霞む  
鳥雲にむかし高等女学生  
うつむきて雨にとけこむ花貝母  
自動ドアに吸込まれたる春の風邪  
春昼のななか剥けぬ茹で卵  
眩きの一語や夜の浅蜩鳴く  
花疲れ我が家のはなに迎へらる  
一輪も一枝もゆれず朝ざくら  
一門の和す“花”のうた花の宴

# 山河集

同人作品



神蔵 器選

国見すと神話の丘や霞立つ  
降臨の天地ひとつに霞みけり  
野遊びのこころ智恵子の空へ泛く  
石ひとつ池に揺らぎて京の春  
堂に脱ぐ足より霞む高山寺

小林 和子

春雪の重さを加へ堀の水  
後記から読む創刊号春遅し  
ビスケットのほろほろこぼれ蝶生る  
鼻高き気分花粉症用マスクかな  
天袋へ入るるは父の雛納

柿沼 盟子

日月の語りし雪を捨て急ぐ  
芝植糸むとて春泥を道までも  
子を抱くピーターラビット草萌ゆる

工藤ミネ子

標かんじき手に老いてはならじ老いて尚  
春動く山門不幸風の中

春一番駅のホームに帽子追ふ  
鈴の鳴る通園かばん鳥帰る  
横田 壘子

五箇山

をちこちに合掌部落の雪解音  
帰る鶴湖の雫を引き上げて  
夕鐘に「七つの子」の楽水温む  
種を蒔く手のひらに風起きにけり  
中村 洋子

水留ま八箇

紅べに唐子椿点せる古今伝授の間  
ひと雨のみづみづしさや西行忌  
春昼の銀座に残る足袋老舗

◇特別作品◇

## 坂の多きまち

岩田 都女

春光の坂のあつまる目黒駅  
涅槃西風竹の切り口水湛ふ  
風光るくれなゐの紙香束つぶね  
老僧とすれ違ふ坂冴返る  
囀や草木に名札ある古刹  
風好きの木五倍子や花の掠れ咲き  
さきがけて大島桜香をこぼす  
フリユートを奏でる肩へ花の散る



枝垂桜フアツシヨン街の芯となし  
包み紙彩とりどりやスイートピー  
諸葛菜駒場東京大学に  
春日傘行人坂にたたみをり  
花便り信濃に暮らすはらからへ  
まち川の花トンネルに照り翳り  
ドライバーで締むる握り柄花曇  
復活祭子らは帽子に羽根飾る  
結婚の裳裾のゆれやみどりさす  
春月のゆれつつのぼる窓辺かな  
眼鏡ぬぐふ灯ともし頃や遠蛙  
ゆく春の母より賜ふ帯を締め

# 風土集



## 神蔵 器選

子がひだりみぎ見てひだり鳥雲に 東京 中嶋 陽子

噂や新居に脚立運び込む

病んで子に白湯をもらひぬ春の雪

子の歌ふボーイソプラノ柳絮飛ぶ

繊細な男の料理木の芽和 東京 奥田 弦鬼

春禽や窓辺に育つヨーグルト

朝行の般若心経鳥交る

血圧のグラフ平らや水温む

石突のささくれだちて遍路杖

冴返る葉種問屋の通し土間 横手 森屋 慶基

止まれば指より冷ゆる雪卸

納屋に吊る父の櫛すすけたり

林檎の樹雪掘つて出す雪の日々

鷹翔つや剪定鋏にぎりしむ

雁の帰るときをりこ糸零し

捨て雪を一度は棒げシヨベルカー 秋田 工藤ミネ子

ものの芽や土の糸ぐれて除雪跡

忌を修す十一単の君子蘭

小町忌のはたまた吾子の忌なりけり

一事にて袂を分かち春の雪 津山 生田恵美子

木の芽どき臉に青き血の透けて

春泥の子をやはらく下げて跳ぶ

春昼や声張つて訪ふ庫裡の土間

数珠の手の法事帰りやつくし摘む

終盤の選挙の村や揚雲雀 静岡 菅原 末野

西行の後に就く道路の臺

地にありて仰向く椿伏す椿

塗り替への回転木馬風光る

啓蟄や使ひ古りたる移植鏝

原子炉が要の町や陽炎へり

# 風土独語／神蔵 器



私は昨年八月二十五日、朝、八時頃、廊下の先の鈴虫を覗き込もうとした時、突然頭からすーっと血が引き冷たい海の底に引き込まれるように倒れてしまった。あと二、三十分遅ければ家人は皆出払ってしまう筈であった。学校は夏休み中であるが、学童クラブに行っている志織(孫)はまだ家にいるだろうと思って「志織、志織」と呼んだ。全く動けなかったが意識はあったのであろう。驚いた志織は出勤しようとして玄関まで出た。パパを呼んで来た。それから佼成病院でCTを撮るまで五分とかなかった。

脳梗塞が心配され、事実、病院では脳梗塞としての手当てを受けた。しかしCTをはじめ色々の検査の結果はわりと良く、四日目には食事も与えられトイレも一人で行けるようになった。「安静が一番、何も考えないように」と言われたがこんなむずかしいことはない。何も考えないで安静にしていると、いつの間にか眠ってしまう。昼間眠ればその分夜が眠れない。後で解ったことだが私の部屋は六人部屋で、内科は私一人、他の五人は外科の患者さんであった。夜中でも看護婦の出入りが多く、痰のからむ患者さんもある。一旦夜中でも目が覚めてしまうとあとはなかなか眠れない。こんな時こそ俳句を作ればいいと思うて俳句のことを考える。そうすると俳句にのめり込むというのか、ますます目が

冴えてしまう。仕方なく短歌を作ることにした。短歌だったら初めてだけれど気楽に作れる。白秋がいい。二、三日して日さんが見舞に来てくれた。早速私の短歌処女作を見せると「まあなんて下手なんでしょう。あのように秀れた俳句を作る人の作とは思えない」と酷評をいただいたしまった。

人間の体は一度狂うと正常な状態を取り戻すのは容易でないようだ。九月一日に退院し、四日後の九月四日には、今度は上室頻拍という脈拍が通常の倍以上、百五十から百六十にも上り、心臓が飛び出しそうな激しい動悸が五時間以上も続き、いっこうにおさまる気配がないので、再び救急車で佼成病院に行った。上室頻拍はたいしたことはなかったが、自律神経失調症とか、頭と心臓に不安を抱く日々が続いてしまった。

そんなわけで「風土独語」は三ヶ月も休めば大丈夫、復起できると思っていたが、九ヶ月にもなってしまった。誠に申し訳なく、深くお詫びしたい。

子がひだりみぎ見てひだり鳥雲に 中嶋 陽子

現代の大都市の道路事情は飽和状態で、殊に小さな子供を持つお母さん方の心配は絶えない。主要道路には信号機が設置され、登下校の時間帯にはお母さんたちが旗を振って子供たちを誘導したりしてくれている。しかし、最も大切なことは、子供自身が自分の目で安全を確認する習慣を身につけることである。陽子さんのお子さんは小学三年生、お母さんに教えられた通り、左を見、右を見て、もう一度左を見て車が来ないか安全を確認している。元気で利発な良太君が目に見えるようだ。